

9 月第 2 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 9 月 10 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 16 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「自分の十字架を背負って」

■聖 書：ルカによる福音書 14 章 25～35（新約 p137～138）

■讃美歌：16 「われらの主こそは」

300 「十字架のもとに」

先週の金曜日(9月8日)は、台風13号の影響で、東京も午前中に大雨になりました。天気予報やニュースを注意して見ていましたら、福島県や茨城県に警報が発出されました。その地名の中に私の出身地である茨城県の常陸太田市が出てきたので驚きました。後で調べましたら床上浸水や床下浸水、土砂崩れもあったようです。また、JR常磐線上下線の運転見合わせや常磐自動車の通行止めもなされたようです。昨日の土曜日は、立川教会におられた飯島牧師のおられる小高伝道所(福島県の浜通りに位置します)で、特別な集会も予定されていたので、大丈夫かしらと心配しておりました。そういうわけで、私たちは、自分自身に多少なりとも関わりのある地名などが出てくると、被災された方々が身近に感じられて、具体的にお祈りすることができるように思います。日々の祈りとはそのようなものと言えるのではないのでしょうか。

さて、本日の聖書箇所はルカによる福音書 14 章 25 節から 35 節です。その中に 27 節で「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」という御言葉があります。本日の説教題も「自分の十字架を背負って」としたのですが、今年の 3 月 12 日受難週第 3 主日にもルカによる福音書の 9 章から、「自分の十字架を背負って」と題してお話をしていることを思い出しました。9 章 23 節 24 節には、「それから、イエスは皆に言われた。『わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。』と記されています。その時には「日本語の『十字架を背負って生きる』という言葉には、『耐えがたいほどの苦難を負うこと』という意味がありますが、「自分の過去のトラウマを背負って生きて行く」という意味で使われることもあります。けれども、キリスト教で用いる本来の意味とは異なっています。もともと『十字架』というのは、主イエスが活動しておられたその当時の必ず死に至らせるための処刑道具でした。ですから、本来のキリスト教の『十字架を背負う』ということは、『死に至ることを覚悟のうえで、すべてを捨てて自己を放棄して、神に従う』ということになります。自らを捨てるということは、自分の親や兄弟、持ち物、財産など、すべての『しがらみ』を捨てるということです。それらをすべて捨てて、神に従うということです。ですから、日本語で言われている『十字架を背負って生きる』ということとは、その言葉の重さが大きく異なっているのです。」とお話ししていました。ですから、「自分の十字架を背負って」とい

うことを何となく分かったような気になっていたのです。しかし深く考えていくと、ルカによる福音書はなぜ、「自分の十字架を背負って」ということを主イエスの言葉として2度も繰り返し記しているのかということについては、私自身が本当には納得できていないことに気づかされました。それで、今回は主イエスの弟子への招きの言葉として、言い換えれば、大勢の群衆の中から、本当に主イエスに従っていこうとしている者だけに語りかけられている御言葉として読んでみました。

本日の箇所 14 章 25 節に「大勢の群衆が一緒について来たが」とあります。少し前の 14 章 1 節から 24 節までの所には、あるファリサイ派の議員の家で安息日に催された食事の席でのことが語られていました。主イエスはその食事の席から立ち上がり、再びエルサレムに向かって歩み始めたのです。それは十字架にかけられて殺されるための旅でした。その旅の途上の主イエスは、ついて来る大勢の群衆たちの方に振り向いて「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」という厳しい言葉を語られました。「わたしの弟子ではありえない」という言い方が二度出てきています。同じ言い方が 33 節にもあります。この言葉を以前の口語訳聖書では、「わたしの弟子となることはできない」と訳していました。つまり「私について来るだけで弟子になれるわけではない」と理解しているのです。私たちの読んでいる新共同訳の聖書でも、25 節の前にある小見出しは「弟子の条件」となっていますから、主イエスに弟子入りするための条件だと考えるのが一般的でしょう。しかし、よく注意して読んでみると、「このような人はわたしの弟子となることはできない」と語られたのではなくて、「わたしの弟子ではありえない」とお語りになったと訳されているのです。そうすると、ここで語られているのは、主イエスに弟子入りするための条件ではなくて、主イエスの弟子となった者が弟子であり続けるためにはどうすればよいのか、という勧めと考えることもできるのです。そのことは 28 節以下に語られている二つのたとえ話からも分かります。塔を建てようとする者のたとえと、他の王との戦いに赴こうとする王のたとえです。いずれも、「まず腰をすえて」考え準備することの大切さが語られています。主イエスの弟子となる、つまり信仰者として生きていくことにおいても、腰をすえてしっかりとした備えを持って取り組まなければ、結局途中で挫折し、あの頃はあんなに熱心だったのに今はどうなってしまったのだ、と人々に笑われるようなことになってしまうだろうと言われたのです。そのための備えとして、必要なことは何かと言うと、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命までも憎むこと」であり、また「自分の十字架を背負って主イエスに従って行くことだ」と言われたのです。さらに 33 節では、「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだけ一人としてわたしの弟子ではありえない」とも言われています。これを聞くと私たちは誰もが、「自分にはこんなことはとてもできない」と思わずにはおれないでしょう。あるいは、カルトと呼ば

れる新興宗教と同じ勧誘の勧めではないか、と思われる方もおられるかもしれません。しかし、そうではありません。

私は今回、26節、27節、33節で語られている「わたしの弟子ではありえない」という言葉が心に残りました。そして、旧約聖書の十戒が「決して・・・してはならない」という断言的否定の命令で記されていることを思い出しました。断言的命令とは、強い否定の命令です。たとえば、第6戒の「殺してはならない」は、日本語に直訳すると「あなたは決して殺さない」となります。その根底には「あなたはわたしの愛する民であるから、決して殺人などしない、するはずがないだろう。」という意味が込められているということ、ある時知りました。十戒とは、十の厳しい命令というより、神からのご自身の選んだ民に対する信頼をこめた愛の語りかけであると考えられるということです。その時に、旧約聖書に対する読み方が大きく変えられたことを覚えています。そのことを思い出したので、非常に飛躍するのですが、主イエスが弟子たちを招かれるときに、「わたしの弟子ではありえない」とお語りになったことをこの断言的命令という考え方に当てはめて考えてみました。「あなたは私に本当についてきたいというのなら、身近にいる大切な人や自分の命を憎むほどに、自分の十字架を背負って従うほどに、そして、自分の持ち物を一切捨てるほどに、私の弟子であるはずだ」と言い換えることができるのではないか、と思うのです。重要なのは、他の誰でもない、「この私」のあり方が問われていることです。そこに「自分の十字架」とは、私たち一人ひとりに与えられている重荷であると同時に、何らかの大切な使命であり、大きな慈しみであることが見えてきたように思います。それは同時に、14章34節35節に語られている、私たち一人一人が、地の塩として聞く耳のある者として歩ませていただけることにもつながるのではないのでしょうか。